

木刀を布團の下へ入れさせて、うつ伏せになつて、母指の爪を弾ぢかせて、漏斗を鳴らしてみた。

「今日からはもう何處へも行かないで、此處に居るんだよ。

黙つて歸つたりすると、四國中なれば何處までも追つ驅けて連れて戻るから」

僕は女に言ひ渡した。

女は頭に手をやつて、バラバラになつたホツレ毛を搔き直してゐた。

「もう少ししたら御飯を持つて來さすからね。

顔を洗ふんだつたら、あちらへ行つても好い」

女は僕がねてゐる間に、何んな事を考へたりしたりしてゐたのだらう。

僕の姉が小砂利の上を歩いて來て、障子の外に顔を覗かせて、女に何か目配せをして物を言

つたやうだ。

僕はドナリ付けた。

女は顔を洗ふと直ぐ又やつて來た。

義母の話し聲がやかましい、僕の頭はしきりといたんだ。